

A-4

ウズベク語における補助動詞 *tur-*「立つ」/*yot-*「横たわる」/*yur-*「動く」/*o'tir-*「座る」の差異
日高 晋介

(国立国語研究所プロジェクト非常勤研究員)

要旨：ウズベク語(チュルク諸語南東語群)では、語彙的な意味を担う副動詞 *V-(i)b* の後に、*tur-*「立つ」/*yot-*「横たわる」/*yur-*「動く」/*o'tir-*「座る」が続き、副動詞の表す動作が継続することを表す。本発表では、補助動詞 *tur-/yot-/yur-/o'tir-*それぞれがどのように異なるのかという問題を、①アスペクトと②主語の意味特性という観点から、コーパス調査とインフォーマント調査を通じて明らかにする。調査の結果、①では、「継続/進行」から「習慣/反復」へという発展が *tur-*「立つ」に最もよく表れ、②でも、*tur-*「立つ」が最も多様な種類の主語を取ることが明らかとなった。これらの考察をもとに、*tur->yot->yur->o'tir-*の順に文法化の度合いが低くなっていくと結論付ける。これは、*tur-*「立つ」と *yot-*「横たわる」が本動詞として主語の「存在」を表せることに関連があると考察する。

0. はじめに

ウズベク語では、語彙的な意味を担う副動詞 *V-(i)b* の後に、*tur-*「立つ」/*yot-*「横たわる」/*yur-*「動く」/*o'tir-*「座る」が続き、副動詞の表す動作が継続することを表す。(1) では、副動詞 *yoz-ib*「書いて」の後に4つの補助動詞が続き、それぞれ「書く」という動作の継続が表されている。ただし、(1)からは、それぞれの補助動詞にどのような差異があるのか不明である(なお、本発表では、4つの補助動詞に続く *-ib* に PRS(現在) というグロスを付す。これは Sjoberg 1963: 113 による記述に従っている)。

- (1) a. *yoz-ib* *tur-ib=man* b. *yoz-ib* *yot-ib=man*
 write-CVB.SEQ stand-PRS=1SG write-CVB.SEQ lie-PRS=1SG
 c. *yoz-ib* *yur-ib=man* d. *yoz-ib* *o'tir-ib=man*
 write-CVB.SEQ move-PRS=1SG write-CVB.SEQ sit-PRS=1SG
 'I write constantly' 「私は書いている」(Bodrogligeti 2003: 740, 743, 745, 748)

そこで、本発表では、4つの補助動詞それぞれがどのように異なるのかという問題を、アスペクトと主語の意味特性という観点から、コーパス調査とインフォーマント調査を通じて明らかにする。結論として、この4つの補助動詞は文法化の度合いが異なるということを主張する。

本発表の構成は、次のとおりである。1節で本発表における分析の観点について、2節で調査についてそれぞれ述べ、3節で結論を述べる。最後に4節で今後の課題を述べる。なお、本発表における例文番号・日本語訳・グロスは発表者による。ウズベク語の表記は、ラテン文字正書法に統一する。

1. 本発表における分析の観点

本節では、それぞれ小節で Ibrahim (1995) による4つの補助動詞の記述を概観しつつ問題点を指摘する。その後に、本発表における分析の観点を述べる。

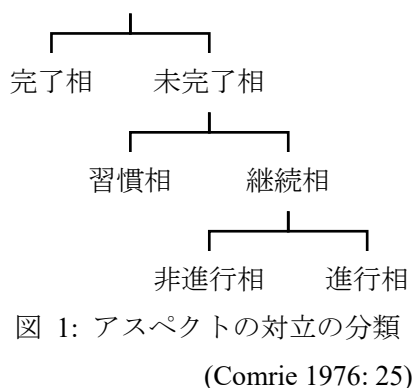
1.1. アスペクト

Ibrahim (1995) は、4つの補助動詞はいずれも継続を表すとしているが、*tur-*「立つ」(2) と *yur-*「動く」(3) では反復も表すとしている。

- (2) *Qo'qon-dan har kun deyarli xabar-lar kel-ib tur-ar edi-o.*
Kokand-ABL every day almost news-PL come-CVB.SEQ stand-PTCP.FUT PAST-3
「コーカンドからほぼ毎日知らせが来ていた。」(Ibrahim 1995: 144-145)

- (3) *Ota-m hamisha “nima bo’l-sa-ng ham bo’l, temirchi bo’l-ma” de-b*
 father-1SG.POSS always what be-COND-2PL also be blacksmith be-NEG say-CVB.SEQ
yur-ar edi-o.
 move-PTCP.FUT PAST-3

「私の父はいつも『何にでもなれ、(でも) 鍛冶屋にはなるな』と言っていた。」(Ibrahim 1995: 147)



ただし、Ibrahim (1995) には、*yot-*「横たわる」/*o’tir-*「座る」が反復も表しうるのかどうかについて記述がない。

そこで、本発表では、4つの補助動詞がどのようなアスペクトを表すのかという問題を検証する。具体的には、「習慣」「進行」「非進行」「反復」を表すのかどうかを検証する。「習慣」「進行」「非進行」は Comrie (1976) による未完了アスペクトの分類 (図 1) から、「反復」は Ibrahim (1995: 144-145, 147) と Comrie (1976: 35) による記述から、それぞれ着想を得た。なお、本発表では副動词语幹の語彙的アスペクトについては取り扱わない。

1.2. 主語の意味特性

Ibrahim (1995) は、副動詞 *V-(i)b* に続く 4つの補助動詞について、アスペクトだけではなく、副動詞の動作が行われる際の主語の姿勢についても述べている。*yot-*「横たわる」以外の補助動詞は、基本的に各々の語彙的意味が表す姿勢での継続動作を表すが、文脈によってはどんな姿勢にも用いられるとされている (Ibrahim 1995: 143, 146-147, 153-154)。例えば、*o’tir-*「座る」は、(4) では座り姿勢での動作を表しているが、(5) では座り姿勢の動作を表しているわけではない。

- (4) *Ancha-dan keyin uy-ga kir-sa-m, ikkov-lar-i Ahad bilan o’yna-b*
 quite.many-ABL after home-DAT enter-COND-1SG two.of.them-PL-3.POSS NAME with play-CVB.SEQ
o’tir-ib=di.
 sit-PRS=3

「だいぶ後に家に入ったら、二人がアハドと遊んでいた。」(Ibrahim 1995: 153)

- (5) *Men sodda shu-ning gap-i-ga ishon-ib o’tir-ib=man.*
 1SG purely that-GEN talk-3.POSS-DAT believe-CVB.SEQ sit-PRS=1SG

「私は純粋に彼の言葉を信じています。」(Ibrahim 1995: 154)

しかし、4つの補助動詞がどんな姿勢の主語にも用いられるとなると、各補助動詞の差異はわからない。そこで、本発表では主語の姿勢ではなく、主語の意味的特性に焦点を当てる。Kuteva (1999) は、「座る」「立つ」「横たわる」の通言語的な文法化について、次の4段階の文法化を提案している。

- (6) human bodily posture verbs > canonical encoding of spatial position of objects > CONTINUOUS (with inanimate subjects) > CONTINUOUS (with animate subjects) (Kuteva 1999: 210 一部改変)

これは、動詞「座る」「立つ」「横たわる」の文法化が進めば、無生物主語を伴った継続を表し、最終段階として有生物主語を伴った継続を表せるようになることを表している。本発表では、Kuteva (1999) にしたがって、4つの補助動詞の文法化の度合いを測る尺度として、主語の意味的特性に注目する。

2. 調査

本節では、前節で述べた二つの観点から、コーパス調査とインフォーマント調査を行う。

まず、コーパス調査の概要を述べる。コーパスはインターネットニュースサイト Ozodlik radiosi (<http://www.ozodlik.org>) からの記事と、*Besh qiz va bir yigit* 『5人の女の子と1人の若者』という小説から成り、それにグロスと日本語訳を付けたデータを分析に用いる (単語数 約2万4千、文字数 約316万5千)。いずれの記事も2014年1月から8月、2015年7月から11月、2016年3月から4月にwebに掲載された。用例は、正規表現を用いてテキストエディタの検索機能で抽出する。

次に、インフォーマント調査の概要を述べる。インフォーマントは1名で、1989年タシケント市生まれの男性である。調査の媒介言語は日本語である。アスペクトについて調査する際には、日本語文が書かれた質問票をウズベク語に訳してもらい、その後に、オンラインでの聞き取り調査を行った。聞き取り調査では、次の二点について尋ねた：①翻訳で現れた補助動詞が他の補助動詞に置き換えられるか、②翻訳で補助動詞が現れなかった場合、4つの補助動詞のいずれかに置き換え可能か。主語の意味特性について調査する際には、コーパス調査で得られた例を参考に、4つの補助動詞を用いた例を発表者が作例し、各作例の許容度をインフォーマントに尋ねた。

2.1. アスペクト

本節では、4つの補助動詞がそれぞれ「習慣」「進行」「非進行」「反復」を表すかどうか検証する。

本発表では、もっぱら文中にある要素や前後文脈から、当該の補助動詞が表すアスペクトを発表者が判断する。「長い期間にわたって性格的なものとしてあらわれてくる場面」(Comrie 1976: 27-28 [山田訳 1988: 47]) を表している場合を「習慣」、「進行の意味と非状態の意味とが結合」(Comrie 1976: 35 [山田訳 1988: 58]) している場合、つまり当該動詞が表す時点で動作が続いている、かつ非状態である場合を「進行」、一回的な動作が「くりかえされる場面」(Comrie 1976: 42 [山田訳 1988: 68]) を表す場合を「反復」と判断する。

表 1: コーパス調査の結果一覧

	tur- 「立つ」	yur- 「動く」	o'tir- 「座る」	yot- 「横たわる」	計
非進行	9	3	2	2	16
進行	8	2	1	0	11
反復	1	1	0	0	2
習慣	1	0	0	0	1
その他	2	0	0	0	2
計	21	6	3	2	32

まず、左記の表 1 にコーパス調査の結果を挙げる。tur-「立つ」/yur-「動く」では「反復」の例が得られ、tur-「立つ」では「習慣」の例も得られた(「習慣」の例は、(7)を見よ)。ただし「反復」の例はyot-「横たわる」/o'tir-「座る」で、「習慣」の例はtur-「立つ」以外の補助動詞で抽出できなかった。

(7) *Makka-da ko'p odam yig'il-ish-i oqibat-i-da fojia-lar ko'p bo'l-ib*
Mecca-LOC many person gather-VN-3.POSS result-3.POSS-LOC tragedy-PL many happen-CVB.SEQ

tur-a=di.

stand-NPST=3

「メッカで多くの人が集まった結果、悲劇が多く起こっている。」(12_09_2015: 47)¹

次に、インフォーマント調査による「反復」と「習慣」の例を挙げる。

¹ ニュース記事から抽出した例には、用例末に (日付: テキストファイル内行数) という情報を付し、小説から抽出した例には、同様に (BeshQiz_va_BirYigit: テキストファイル内行数) という情報を付す。

「反復」を表す3例(多数回あるいは短い期間を表す副詞+瞬間的な一回性動作を表す動詞「咳をする」「ノックする」「殴る」を含む)には、翻訳では3例のどれにも現在進行形 *-yap* が用いられていた。各例において動詞を4つの補助動詞を含んだ形に置き換えると、*o'tir-*「座る」の容認度が低くなった。(8)に例を挙げる(?は容認度が低いことを表す)。

(8) *U bokschi 3 daqiqa davom-i-da raqib-i-ni kaltakla-b*
 that boxer minute continuation-3.POSS-LOC opponent-3.POSS-ACC beat-CVB.SEQ
tur-ib=di/yot-ib=di/yur-ib=di/?o'tir-ib=di.
 stand-PRS=3/lie-PRS=3/move-PRS=3/sit-PRS=3

「そのボクサーは3分間ずっと相手を殴っている。」

なお、インフォーマントは(8)の*o'tir-*「座る」について「あまり使わない、*kaltakla-*「殴る」と合わない」とコメントしている(4節で再度詳述する)。つまり、*o'tir-*「座る」は「反復」を表しにくいと言える。

「習慣」を表す3例(「毎日」か「毎朝」+「勉強する」「食べる」「見る」)には、翻訳では非過去 *-a-y* あるいは現在進行 *-moqda* が用いられている。置き換えでは、全3例中、*tur-*「立つ」は3例すべてで、*yot-*「横たわる」は2例で、*yur-*「動く」は1例で、*o'tir-*「座る」は2例で、それぞれ用いられている。つまり、各補助動詞で許容度に差があるものの、全ての補助動詞で「習慣」が表されることが明らかとなった。

2.2. 主語の意味特性

まず、コーパスから抽出した、4つの補助動詞を含む文の主語を全て挙げる。ウズベク語の例は挙げずに日本語訳のみ挙げる場合は、次の2つの場合である：①類似した属性を持つ主語が複数現れた場合(例えば、*qizlar*「女子たち」と*onasi*「その母親」は「人間」にまとめる)、②当該の文に主語が現れておらず文脈から判断した場合。なお、()内の数字はコーパスでの出現数を表わす。

tur-「立つ」21例：

「人間」(12)、「動物」(3)、「特徴」、*iz*「跡」、*fojialar*「悲劇(複数)」、*O'zbekiston*「ウズベキスタン」*g'allazorlar*「麦畑(複数)」、*g'o'za nihollari*「綿の木の芽(複数)」

yur-「動く」6例：

「人間」(4)、「飛行機」、*cho'l qushlari*「砂漠鳥たち」

yot-「横たわる」2例：

“*rayxonchalar*”「青い奴ら」
poyonsiz cho'l「果てしない荒野」

o'tir-「座る」3例：

人間(2)、
barcha transport「全交通機関」

次に、これらの主語の大まかな意味の傾向を述べる。*tur-*「立つ」は無生物のみならず、抽象名詞も主語に取る((7)*fojialar*「悲劇(複数)」)。*yot-*「横たわる」も無生物を主語に取るが((9)*poyonsiz cho'l*「果てしない荒野」)、抽象名詞が主語である例は抽出できなかった。

(9) *Lola-ning ota-si ham ... yastan-ib yot-gan poyon-siz cho'l-ga*
 NAME-GEN father-3.POSS also spread-CVB.SEQ lie-PTCP.PAST limit-PRIV dessert-DAT
razm sol-di-o.
 look put-PAST-3

「ローラのお父さんも(中略)広がっている果てしない荒野を見渡した。」(BeshQiz_va_BirYigit: 2927)

一方、*yur-*「動く」と *o'tir-*「座る」は動くもののみ主語に取るようである ((10) *barcha transport* 「全ての交通機関」)。

(10) ... *barcha transport so'ng-gi bekat-ga kel-ish-i bilan=oq grafik-ni kut-ib*
 all transport after-ADJLZ station-DAT come-VN-3.POSS with=EMPH diagram-ACC wait-CVB.SEQ
o'tir-masdan darhol ort-ga qayt-a=di.
 sit-CVB.NEG soon back-DAT return-NPST=3

「…全ての交通機関は、終着駅に來ると、定刻を待たずに、すぐ後ろに戻る。」 (13_07_2015: 35)

インフォーマント調査では、無生物主語の調査文として、*fojia*「悲劇」、*iz*「跡」、*po'yonsiz cho'l*「果てしない荒野」、*O'zbekiston*「ウズベキスタン」、*g'allazor*「麦畑」が主語の文を用いた。これらの例全てで、*yur-*「動く」と *o'tir-*「座る」は許容されない。(11) では *iz*「跡」が主語である。

(11) *Mashina-ning iz-i yaqqol ko'rin-ib tur-ib=di/yot-ib=di/*yur-ib=di/*o'tir-ib=di.*
 car-GEN trace-3.POSS clearly see-PASS-CVB.SEQ stand-PRS=3/lie-PRS=3/move-PRS=3/sit-PRS=3
 「車の跡がはっきりと見えている。」

なお、抽象名詞である *fojia*「悲劇」が主語の場合 (12) は、*tur-*「立つ」しか許容されない。

(12) *Har kun-i urush-da fojia sodir bo'l-ib*
 every day-3.POSS war-LOC tragedy appearance be-CVB.SEQ
*tur-a=di/*yot-a=di/*yur-a=di/*o'tir-a=di.*
 stand-NPST=3/lie-NPST=3/move-NPST=3/sit-NPST=3
 「毎日、戦争では悲劇が起きている。」

3. 結論

本節では、二つの観点からの調査結果をそれぞれ考察してから、結論を述べる。

	継続／進行 > 習慣／反復
<i>tur-</i> 「立つ」	----->
<i>yot-</i> 「横たわる」	----->
<i>yur-</i> 「歩く」	----->
<i>o'tir-</i> 「座る」	----->

図 2: アスペクトにおける文法化

まず、アスペクトについての調査結果 (2.1 節) をもとに、各補助動詞における文法化の発展度合いを左記の図 2 に示す。「継続／進行」から「習慣／反復」へ、という発展の向きは、Kuteva (1999: 210) による「継続マーカーから習慣マーカーへの発展は最もよく見られる発展の一つである」という記述に従っている。なお、本発表では、「習慣」と「反復」

をそれぞれ文法化の一段階としては区別しない。なぜなら、両者は事象の複数生起に関わるアスペクトとして、一つの事象に関わるアスペクト (継続／進行) と意味的に対立しているとみなせるからである。

Ibrahim (1995) による記述 (1.1 節冒頭) と 2.1 節のコーパス調査 (表 1) から、4 つの補助動詞は全て、継続あるいは「進行」を表すことが明らかとなった。ただし、「習慣」では各補助動詞が許容されない場合があり、「反復」ではいかなる例でも *o'tir-*「座る」で置き換えた文の許容度が低くなった ((8) を見よ)。したがって、アスペクトにおける各補助動詞の文法化度合いは (13) のように示される。

(13) *tur-*「立つ」 / *yot-*「横たわる」 / *yur-*「動く」 > *o'tir-*「座る」

	人間・動物 > 乗り物 > 無生物 > 抽象名詞
tur-「立つ」	----->
yot-「横たわる」	----->
yur-「歩く」	----->
o'tir-「座る」	----->

図 3: 主語の意味特性における文法化

次に、主語の意味的特性についての調査結果 (2.2 節) をもとに、各補助動詞における文法化の発展度合いを左記の図 3 で示す。「当該名詞が意志的に動作可能であるかどうか」を度合いに反映させている。左側に位置する

名詞 (人間・動物) は意志的な動作が可能で、右側に位置するほど意志的な動作ができなくなる。

2.2 節の調査では、どの補助動詞も「人間・動物」「乗り物」を主語に取ることが明らかとなった。しかし、yur-「動く」と o'tir-「座る」は無生物主語を取らず、tur-「立つ」以外では抽象名詞を主語に取らない。したがって、主語の意味的特性における文法化度合いは (14) のように示される。

(14) tur-「立つ」>yot-「横たわる」>yur-「動く」/o'tir-「座る」

なお、この結果は (6) で示した文法化の段階 (Kuteva 1999: 210) とは異なっている。発表者は、ウズベク語においては (6) と異なる文法化のプロセスが進んでいると考える (本節末で再度詳述する)。

ここまで、アスペクトと主語の意味特性という、二つの観点からの調査結果をそれぞれ考察してきた。(15) は、アスペクトについての分析結果 (13) と主語の意味特性についての分析結果 (14) を統合して 4 つの補助動詞の文法化度合いを表したものである。(15) では、左から順に補助動詞の文法化の度合いが低くなっていくことが表されている。

(15) tur-「立つ」>yot-「横たわる」>yur-「動く」>o'tir-「座る」

Kuteva (1999) では、姿勢に関する動詞「座る」「立つ」「横たわる」の文法化を同列に扱っている。一方、ウズベク語の補助動詞 tur-「立つ」/yot-「横たわる」/o'tir-「座る」の間には、明らかな差があり、これら 3 つを同列に扱うことはできない。特に、tur-「立つ」/yot-「横たわる」と o'tir-「座る」の間に大きな差が見られる。アスペクトの観点からは、o'tir-「座る」が他の 3 つの補助動詞に比べて「反復」を表しにくいことが挙げられ (2.1 節 (8) を見よ)、主語の意味的特性の観点からは、o'tir-「座る」が乗り物以外の無生物を主語に取らないことが挙げられる (2.2 節を見よ)。

今回の調査では、特に主語の意味的特性において、上記の図 3 の結果が出た。補助動詞 tur-「立つ」/yot-「横たわる」は広く有生物も無生物も主語に立ちうるが、yot-「横たわる」/o'tir-「座る」は乗り物以外の無生物は主語に取らない。この理由について、発表者は、本動詞として「存在」を表すかどうかという点が、補助動詞としてのふるまいの差につながっていると考えられる。下記の (16) と (17) で示したように、tur-「立つ」と yot-「横たわる」は「存在」を表すことができる。一方、yur-「動く」と o'tir-「座る」は「存在」を表すことができない。

(16) *Shu bois-dan old-imiz-da juda jiddiy yo'l tur-ib=di.*

that cause-ABL front-1PL.POSS very serious road stand-PRS=3

「だからこそ、我々の前に非常に険しい道がある。」 (<https://sports.uz/uz/news/view/islom-isoqjonov-chempionlik-uchun-kurashyapmiz-va-oldimizda-hali-jiddiy-yol-turibdi-28-06-2020> [最終閲覧日: 2021/09/20])

(17) *Kitob stul ust-i-da yot-ib=di.*

book table upper-3.POSS-LOC lie-PRS=3

「本がテーブルの上にある。」 (Begmatov et al. 2006: 50)

つまり、補助動詞としての *tur-*「立つ」/*yot-*「横たわる」と *yur-*「動く」/*o'tir-*「座る」が無生物を主語に取るか否かは、本動詞が「存在」を表しうるかを反映している。

本動詞として用いられる *tur-*「立つ」と *yot-*「横たわる」の間にも明らかな差がある。(16)で示したように、*tur-*「立つ」では抽象物である主語(「道」)が許されるが、*yot-*「横たわる」では許容されない(なお、(16)の *yo'l*「道」は道そのものではなく、「過程」を比喩していると考えられる。なぜならば、(16)の前文では「我々には(サッカー国内リーグとアジアチャンピオンズリーグの)チャンピオンシップを獲得するという役割がある」と述べているためである)。補助動詞としても、同様のふるまいが見られ、抽象物 *fojia*「悲劇」が主語の場合(12)では、*tur-*「立つ」しか許容されなかった。したがって、補助動詞 *tur-*「立つ」と *yot-*「横たわる」が取りうる主語の違いは、本動詞が抽象物を主語に取りうるか否かを反映していると結論付ける。

さらに、Kuteva (1999) による補助動詞「座る」「立つ」「横たわる」の文法化の段階(6)の後半では、無生物主語を伴う継続相から有生物主語を伴う継続相への発展が示されていたが、ウズベク語を対象とした今回の調査では、それとは反対の結果が得られた。つまり、4つの補助動詞はそれぞれ有生物主語を取り、より文法化が進んでいると考えられる *tur-*「立つ」のみが抽象物を主語に取る。したがって、発表者は、Kuteva (1999) による文法化の段階は通言語的な発展段階としては再考の余地があると考察する。

4. 今後の課題

本発表では、文法化という側面から、4つの補助動詞の差異を明らかにした。ただし、副動詞語幹の語彙的アスペクトと補助動詞が実現する意味の関連については、本発表で扱えなかった。例えば、インフォーマントは(8)の *o'tir-*「座る」について「*kaltakla-*「殴る」と合わない」とコメントした。これは *kaltakla-*「殴る」と *o'tir-*「座る」が意味的に相性が悪いことを示唆していると考えられる。今回の結果を踏まえ、今後は語彙的アスペクトにも着目して調査を発展させたい。

略号一覧 (Leipzig Glossing Rules に記載されていないもののみ掲載)

ADJLZ (adjectivalizer) 形容詞化/ EMPH (emphatic) 強調/ NAME (proper noun) 固有名詞/ PRIV (privative) ~なしの/ SEQ (sequential) 継起/ VN (verbal noun) 動名詞

参考文献

Begmatov, E., va A. Madavaliyev, N. Mahkamov, T. Mirzaev, N. To'xliiev, E. Umarov, D. Xudoyberganova, A.

Hojiev. (2006) *O'zbek tilining izohli lug'at. ikkinch jild. E-M*. [ウズベク語用例付き辞典 第2巻 E-M]

Toshkent: "O'zbekiston milliy entsiklopediyasi" Davlat ilmiy nashriyoti.

Bodrogligeti, András J. E. (2003) *An academic grammar of Modern Literary Uzbek*. München: Lincom Europa.

Comrie, Bernard (1976) *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press. [山田小枝訳 1988 『アスペクト』東京: むぎ書房]

Ibrahim, Ablahat (1995) *Meaning and usage of compound verbs in modern Uighur and Uzbek*. Ph.D. dissertation, University of Washington.

Kuteva, Tania A. (1999) On 'sit'/'stand'/'lie' auxiliation. *Linguistics*. 37(2): 191-213.

Sjoberg, Andrée F. (1963) *Uzbek Structural Grammar*. Uralic and Altaic Series, Vol.18. Bloomington: Indiana University.